

モンゴルで菜の花を大規模栽培し、バイオディーゼルの燃料（BDF）を製造するプロジェクトが、滝川市の「たきかわなたね生産組合（23戸）」の協力で今春から始まる。建設コンサルタント大手の日本工営（東京）の社員らが現地法人を設立、最終的な栽培面積は約5万畝を予定している。滝川は全国有数の菜の花産地でBDFへの先進的な取り組みで知られており、空知で培ってきた技術が、地球温暖化対策の国際的な取り組みに生かされることになった。

# モンゴルで咲く 滝川の技術

## バイオ燃料用菜の花栽培

2007-2-1

BDFは動植物由来の油をディーゼル代替燃料として使えるように交換したもので、循環型エネルギーとして今後の利用拡大が見込まれている。計画によると、事業主体はモンゴルの企業経営者、日本工営の社員ら十人で設立した現地合弁会社「ナノハナ」。予定地は首都ウランバートルの北約二百キロで、社会主義政権崩壊以来、休耕地になっ

五月ごろから八百六十万トンまで増やす予定。投資額は搾油やBDF製造設備建設を含め計約百二十億円を見込む。ナタネから取り出したBDFと搾油後のかすを売却する現地鉱山会社、飼料工場とは既に覚書を

取り交わした。将来は日本へのBDF輸出も視野に入れている。この事業には菜の花栽培で実績のある「たきかわなたね生産組合」が協力する。宮井誠一組合長は「気温は氷点下三〇度以下になる」など気象条件がかなり異なる。このため五月に播種し九月に収穫する春まき栽培を中心に行う計画。

北海道では秋に種をまき、越冬させて翌年夏に収穫するのが一般的なのに、モンゴルでは年間降水量が三、四百ミリ程度と少なく、冬は「地球環境にも貢献できる」と意欲を示す。日本工営コンサルタ

技術的な課題は多い。ただ、収量は秋まきの半分程度しか期待できない。

日本工営  
5月から  
生産組合現地で協力